

高齢発症潰瘍性大腸炎の増悪因子

研究協力者 東山正明 防衛医科大学校内科学 講師

研究要旨：

65歳以上の高齢発症潰瘍性大腸炎患者が増加している。今までの我々の検討では、高齢は重症度や入院、手術の増悪因子だが、個々の患者のフレイルの程度も考慮する必要があるとされている。個人調査票のデータを用いて、フレイルの要素である栄養状態からリスクを評価することを目的とした。

共同研究者

高本 俊介、穂苅 量太
(防衛医科大学校内科学)

抽出することができ、有用性が示された。高齢発症潰瘍性大腸炎患者においては、年齢に加え、栄養状態などを含めたフレイルの状態を考慮して治療方針を決める必要性が示唆された。

A. 研究目的

高齢発症潰瘍性大腸炎の増悪因子を明確にすること。

B. 研究方法

個人調査票のデータベースを用いて、高齢者における脆弱性の指標の一つである geriatric nutritional risk index (GNRI) を計算した。GNRI と年齢のどちらが入院、手術の増悪因子となるか多変量解析で検討した。

(倫理面への配慮)

データは対応表のない匿名化がされている。

C. 研究結果

高齢になるにつれ入院、手術のリスクは上昇傾向にあったが、GNRIの方がより強い増悪因子であった。

D. 考察

BMI と血清アルブミン値から計算される GNRI は高齢発症潰瘍性大腸炎患者のなかから、重症化、入院、手術などの危険性の高い患者を

E. 結論

高齢発症潰瘍性大腸炎では、フレイルの要素である栄養状態が大きく関与している可能性が示唆された。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Geriatric Nutritional Risk Index is Useful for Predicting Risk of Hospitalization and Surgery in Elderly-Onset Ulcerative Colitis (投稿中)

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1. 特許取得

なし

2．実用新案登録

なし

3．その他

なし